

芥川龍之介のすけ 芥川龍之介と説話

近代の小説家芥川龍之介（一八九二年～一九二七年）の「地獄変」という小説は、『宇治拾遺物語』の「絵仏師良秀、家の焼くるを見て喜ぶこと」と、『古今著聞集』の「巨勢弘高の地獄変の屏風を画くこと並びに千体不動尊を画きて供養のこと」が素材になっています。

この小説の、「地獄変の屏風を描いた良秀という絵師」の話の部分は、次のように始まります。

良秀と申しましたら、あるいはただいまでもなお、あの男の事を覚えていらっしゃる方がございましょう。そのころ絵筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申されたくらい、高名な絵師でございます。

「地獄変」では、この後、「絵師良秀」の狂気とも思える行動が描かれます。それは、わが娘の命さえ引き換えにするほどの芸術に対するすさまじい執着でした。

芥川は他にも「羅生門」「藪の中」など古典説話に基づく小説をいくつも書いていますが、説話を素材とするのは、次

のような意図があったようです。

今僕があるテーマをとらえてそれを小説に書くとする。そうしてそのテーマを芸術的に最も力強く表現するためには、ある異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起こったこととしては書きこなしにくい。もし強いて書けば、多くの場合不自然の感を読者に起こさせて、その結果せつかくのテーマまでも犬死にをさせることになってしまう。（中略）僕の昔から材料を採った小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障碍を避けるために舞台を昔に求めたのである。

（『澄江堂雜記』より）

古典説話にある不思議な（異常な）できごとやそのおもしろさが、芥川の創作を支えていたのかもしれない。